

31歳、社会人歴6ヶ月 それでも僕には夢がある

18歳 レコード屋の雇われ店長

高校を出た18歳の春から30歳まで世間的には理解不能なフリーターとして働いた。業種はサービス業。23歳まではレコード屋の雇われ店長（バイトなのに…）当時世界の町の中で一番多くのレコード屋がある町として知られた渋谷宇田川町のヒップホップ専門店。取り扱い商品はアメリカ産のヒップホップ、中でもカリフォルニア州から生まれた **west coast rap** という分野。ヒップホップという今でこそポップシーンにあたりまえのように取り入れられているけども当時は作り手も聞き手も不良の音楽みたいに思う人が多かった気がする。実際、黒人文化から発達したところが強く社会や政治や差別に対する反発や嘆き、それを言葉で表現する。当時の僕にリンクしたのだと思う。

24歳 サッカーコーチ

24歳の時サッカーのコーチを本格的に始めることにした。それは僕が幼いころ在籍してたチームで、実は高校生ぐらいから時々手伝いをしてきた。現状を話すとき監督の口から「毎日くる？」と話をいただいた。

チームは地域の小学1-6年生を対象に強さよりもサッカーの魅力を伝えることに力を入れていた。それゆえによく負けていた。監督は感情的な男で、よく叱っていた。だからこそ僕に与



えられた業務は褒める、励ますことだった。（今思うと）いいプレーができた時に心から褒めて失敗した時には「だいじょうぶ、次は成功するよ！」と送り出す。本当にこれしかやってなかった。

フラジル好きの監督さんたち

コーチングの勉強をしていくことで褒めることの大切さにあらためて気付かされた。ただ異質なコーチングと当時の関係者から言われたことはいうまでもない。どのチームも叱咤激励の叱咤の部分しかなかったから。しかし、そんな、怒ってばかりの監督さんたちも話せば夢を語り出す。「ブラジル流のサッカーがしたい。ダンサブルなドリブルをして刺すようなパスを出して」って。でも、ブラジル好きなんですねーなんて尋ねると。口を揃えて「行った事はないんだけどね」って。よくよく考えるとおかしいですよ？だって行ったことないのに見たこともないのに、感じてないのにそれを生身の選手に伝えちゃうんだから。なんて生意気にも思った。

26歳 単身 フラジルへ

そして、俺行こう！行って本当のブラジルサッカーってなんなのかこの目で確かめようと思ったのです。そして26歳の夏単身ブラジルへ。

プロ・アマ問わず何チームかを渡り歩き、ビザが切れるぎりぎりの三ヶ月間、サッカーの香りがする場所にただただ足を運んだ。感想ではないけど、夢のような世界だった。どの地区のどの町にも愛するチームのユニフォームを身にまとった老若男女がいる国、歩けば電車に乗ればバーに入れば、TVをつければそこら中にサッカーがあった。日常にサッカーが確実に入っているのです。逆にいえばサッカーでひとつを向ける国ともとれる。僕はこの部分に何よりも心惹かれました。

地球防衛軍ってというのはどう？

帰ってからコーチを続け、正社員になることを信じ続けましたが機会には恵まれず。帰国後、よく交流をしていたアクセサリー屋の店主Hさんに人生観を学びに行った。Hさんは僕に転機を与えた人。高校を出て社会に出た僕はやりたいことが見つからなかったのでもやりたいようにやっていた。けれど、深さみたいなものがなくて、この人によく突っ込まれていた。よく、誇りをもって生きてるか？って質問をされた。正直、なかったかもしれない。そう思い、誇りを持てるものを探した。見つからなかった。Hさんは言った。地球防衛軍ってというのはどう？突発的過ぎて驚いた。というか何だ！地球防衛軍って！

Hさんのポリシー

ここで僕の20代のターニングポイントとなったHさんについてだけど、出会いは渋谷のレコ屋時代、Hさんは隣でアクセサリー工房を営んでいた。自作アクセサリーを販売する工房のオーナーで、個にピントを合わせた作品が大多数だった。レコ屋を経て再会後、僕もネックレスを2点作ってもらった。指針や夢を込めて形にして頂いて、いうまでもなく今も胸元で輝いている。メッセージ性が込められているから毎日それを身に着けることで今の立ち位置を再確認できる。僕はそれらを手にしてからあまり物を買わなくなった。長い時間を懸けて身に着けていこうと思えるものだけを買おうと思うようになった。そこには豊かさがあったから。

大量生産・大量消費の時代に

この原稿を書くにあたって地球防衛軍についてHさんにもう一度聞いてみた。すると「実はウルトラマンなんだよね。ウルトラマンは宇宙からの外敵から地球を守る。その思いをもった登場人物を地球防衛軍と呼ぶ」と、現代の日本がかかえる大量生産・大量消費の問題について僕に伝えてくれた。物を大切にしない時代風潮の中で、選択する基準を、使い続ける大切さをHさんは教えてくれた。説得力があった。言葉がスルスルっと心に入ってきた。僕は水をえた

魚のようにワクワクした。

ブランドや流行にとらわれず捨てられないものを買って、色あせてもなお身に着けていく。壊れたら直し、聞こえは悪いけど経年劣化すらも楽しんでいく。Hさんという人柄とその作品の持つパワーに教えられた。その楽しみを体験し、今度は伝えたくなった。

量より質の文化を構築したい

Hさんの話から4年経った今、僕は本当に地球防衛軍となった。ウルトラマンではない。地球防衛軍＝産業廃棄物処理だ。なぜ？最高の奉仕だと思ったから。前に書いた。やりたいことが見つからなかったのでもやりたいようにやってきた。その結果やらなきゃいけないことがわかってきた。子供達と共に過ごし、いい未来を作りたいと。

僕はサッカーがあったから今があると思える。だからサッカーを続けられる未来を描きたい。コーチとしてプロにはなれなかったけど、育ててもらったのは確か。ブラジル



での経験も大きい。だからこそ地球環境視点から貢献をしたい。もうひとつはHさんから学んだ、量より質の文化を構築したい。身の丈にあった物を身に着ける豊かさを発信していきたい。不要となり捨てられていく産業廃棄物、その処理の最前線に立ち、発想を変え、その捨て方ではなく活かし方を思考し形にしていきたい。

2013年9月、社会人として現在の前橋の会社へ入社。ここでは廃棄物の95パーセントをリサイクル、リユースし、物の価値を最大限に活かしている。東京からこの土地にきてまだ半年。やりたいことがない人生から、やらなきゃいけないことが見つかった。原点を忘れずに発信を続けていく。